

農家に学ぶ留学生受入の思想と方法

秋田県仙北市西木町の
グリーン・ツーリズム事例集

牲川 波都季

関西学院大学総合政策学部 牲川研究室

農家に学ぶ留学生受入の思想と方法

秋田県仙北市西木町の グリーン・ツーリズム事例集

牲川 波都季

秋田大学国際交流センター

はじめに

留学生や外国人研究員を大学等に受け入れる場合、教職員は、勉強だけでなく生活や課外活動など、学内外のさまざまな場面で、日々留学生と関わることとなります。一人ひとりの留学生が、勉強と生活を充実させ満足して出身へと戻っていけるように、職務として支援活動を行うのが、留学生担当教職員の役割と言えます。

けれども、そうした担当教職員がその職務内容についての高い専門性を持っているとは限りません。大学等の職員は3年程度で所属を変えていくのが通常であり、任期なしで留学生受入専従者として雇用されている者はわずかです。教員に関しても、留学生受入を担当する部局所属教員の専門は、日本語教育や日本文学・経済などである場合が多く、留学生相談部門を有している場合でも、留学生アドバイジングなどで学位を得たスペシャリストと言える教員はほとんどいないでしょう。

本冊子の筆者である私自身も専門は日本語教育ですが、2008年6月に現職場（秋田大学国際交流センター）に着任して以降は、学外での生活も含めた留学生の受け入れ態勢整備を業務の一つとしてきました。その中で感じてきたことは、本当に留学生の立場にたち、彼女／彼らにとって生涯の記憶に残るような勉強生活環境を作っているといえるのかということでした。

環境とは、授業のプログラムやチューターによる支援といった大きな態勢に限らず、留学生への語り方や問題が起こった時の対応など日々の会話と行動によって作られていくものも含まれます。毎日起こるトラブルへの対応の方法、そのときの留学生への語りかけの仕方一つで、私たちと留学生との信頼関係は少しずつ築かれたり、逆に一瞬にしてくずれさったりするものでしょう。トラブルにきちんと対応することで、受け入れ態勢の大きな枠組みも改

善でき、また留学生からの信頼を得てさらにトラブルを率直に訴えてくれるような関係づくりが可能になります。この循環は、留学生受入体制の土台として不可欠のものですが、毎日の業務の忙しさの中で、トラブルや留学生ときちんと向き合うことも、一体どうすればよいのかよかったのかと省みることもできないでいる。

このケース・スタディ集は、多忙な留学生受入担当教職員が少し立ち止まり、自分の日々の業務を振り返るきっかけとなることを目指して作ったものです。事例は、秋田県仙北市西木町で、グリーン・ツーリズムを営む農家7軒に筆者がインタビューし、これまでに実際に出会ったトラブルとその解決方法に基づいて作成しました（この農家のみなさんについては「おわりに」で詳しく紹介します）。

なぜ留学生の受入を考える際に、教職員が出会ったトラブルではなく、農家の方の事例を取り上げるのかというと、両者が置かれやすい状況に共通点があるからです。

グリーン・ツーリズムは、農業や農家民泊を体験する旅行形態の一種です。その運営農家は普段はその家の農作業を行っており、申し込みがあった場合にだけ、家に体験者を受け入れます。

秋田県仙北市西木町のグリーンツーリズム運営農家は、留学生のほか小学生や個人の外国人旅行客などさまざまな人々を、自分の家という非常に私的な日常生活に招き入れてきました。その経験は長いお宅で30年以上にもわたるもので、体験者たちから日々さまざまな要望があり、また問題も起こってきたのではないかと想像されます。しかしそうした要望をかなえすぎると、農家の日常生活を体験してもらうという趣旨に合わなくなりますし、また自分たちの生活習慣が動かされることになり、ストレスにもなるでしょう。また問題にうまく対応しなければ、よい思い出を作って帰ってもらうこともできず、体験希望者が減っていく恐れもあります。

同じように、大学等の留学生担当教職員も、毎日、留学生からさまざまな要望を受けます。その要望をあまりに受け入れすぎると、大学の予算や規則、個々の教育・指導方針に反することとなり、また他の日本人学生と同じように、日本での勉強や生活を経験してもらうということができなくなります。そして問題への対応に失敗すれば、留学先として選ばれなくなってしまいます。

本冊子に出てくる事例が示すように、グリーン・ツーリズム運営農家の方は、自分にとっての異質な他者の受け入れを、日常生活にとっての刺激、仕事や地域の意義を再発見する機会、新しいことを勉強するきっかけとして捉えています。つまり、大学等に留学生を受け入れるということも、新たな生活スタイルや価値観、物事の進め方を取り入れるきっかけになりうるということです。単に既存の大学システムに留学生を当てはめて、郷に入っては郷に従えを強いるのではなく、留学生の提案やトラブルに一つひとつ対応していく営みそのものが、大学の教育研究の質の向上につながっていくと筆者は考えています。

では、留学生の受け入れにともなうトラブルに、どう対応していけばいいのでしょうか。どうすれば、積極的な意味をもつものへと変えていけるのでしょうか。

この小冊子では、農家の方々が実際に出会ったトラブルと、それにどう対応したかをまとめました。農家の対応方法を見る前に、自分だったらどうするかそれはなぜかを考えてみてください。特にそれはなぜなのかをじっくりと考えることが、自分にとって留学生とはどのような存在なのか、どのように留学生と接していきたいのか、自分の留学生受け入れの目的は何かなどを見つけるきっかけになります。

また農家の方の対応方法を読む際にも、方法よりむしろ、なぜそのような対応方法をとったのか、その裏にある理由や考え方を想像してみてください。それと自分の考え方を比べてみることで、新しい発見や自分なりの今後の方

それと自分の考え方を比べてみることで、新しい発見や自分なりの今後の方向性が見えてくると思います。

冊子が主な利用者として想定しているのは、教育機関の留学生担当教職員や国際交流機関の職員です。しかしこうした職業の方に限らず、たいていの人間は、日々自分にとって異質な他者と接触し、何らかの協働作業を行わずを得ません。この意味では、より広範な方々に手に取っていただきたい一冊です。

目次

はじめに	i
本冊子の使い方.....	1
Case1 日本語で会話できない.....	3
Case2 食事に口を付けてくれない.....	15
Case3 お風呂のお湯を抜く.....	25
Case4 ホームシック.....	29
Case5 仲間に入れない.....	33
Case6 まったく話さない.....	37
Case7 急に泣き出す.....	41
Case8 取っ組み合いのけんか.....	45
Case9 あまりにわがままな行動.....	49
Case10 約束の時間に遅刻.....	53
おわりに	56

本冊子の使い方

基本編

1. 目次を読み、Case を選ぶ。

興味・時間に合わせ 10 ケースから選ぶことができます。

2. Case のページを読む。

トラブルの内容・状況がわかります。

3. 自分の解決方法と理由を考える。

グループディスカッション、ワークシート、ポスター作成などで自分の提案を考えてみましょう。

4. Solution のページを読む。

「農家の方から」も読み、解決方法のポイントと理由を考えてみましょう。

5. ポイントのページを読む。

ポイントは、筆者の解説です。

6. 自分の解決方法・理由と比べる。

ポイントまで読んで比べてみましょう。

7. 自分の Solution 最終案を作る。

農家の方の Solution から取り入れたいことがあれば、どうして取り入れたほうがよいのかその理由も考えてみましょう。

ワークシート、ポスターなどを使って、解決案を作りましょう。

8. 留学生受入業務への応用を考える。

新しく発見した考え方や方法があれば、それを留学生受け入れ業務にどう取り入れられるかを考えてみましょう。

.....

応用編

.....

1～7. 基本編と同じ

8. 留学生の事例にあてはめてみる。

Case と自分の留学生対応事例で近いものがないか、振り返ってみましょう。

そのときの対応方法・理由と、今回の Case で最終的に自分が考えた解決案とを比べてみましょう。

9. 事例の新しい解決方法を考える。

比べた結果を生かし、次回同じような事例があった場合の解決方法と理由をまとめましょう。

10. 留学生受入の理念を探る。

なぜ留学生を受け入れる必要があるのか、その目的に対し自分は思うのか、その目的に対して自分はどう行動したいのかを考えてみましょう。

留学生を受け入れる必要はないという思いがあれば、そう思う理由も考えてみましょう。

～ 利用のすすめ ～

- * 留学生担当教職員対象 FD 研修のテキストとして
- * 留学生受入業務を一人でゆっくり振り返るヒントとして
- * 他者との関係で悩んだ時の読み物として

Case 1

日本語で会話できない

市の委託を受け、英語圏の高校生を団体で受け入れました。高校生・引率者は、日本語がまったくかほとんどできませんでした。

しかし宿泊して農作業を体験するので、食事の好みや農作業の方法を説明する必要がありました。

受け入れた農家には、英語での意思疎通が得意という人がいませんでした。

あなたならどうしますか？

Solution 1-1

ボディランゲージ

身振り手振りで，目を見て顔を見て，一生懸命話しました。
漫画や絵も使いました。

～農家の方から～

目を見て一生懸命話せば，相手も一生懸命理解してくれようとするし，食事がおいしいというようなことも，オーバーリアクションで，一生懸命伝えようとしてくれます。

親戚に通訳を頼むこともできますが，仲間に入れないと悔しいのです。

ポイント

- 自分のことばが理解してもらえない，相手のことばが理解できなくてもあきらめず，気持ちや意図を伝え合うために他の方法を工夫する。
- 通訳が間に入ると悔しいと思うほどに，伝えたい，理解したいという熱意があり，その熱意を，ボディランゲージで相手に伝えている。

Solution 1-2

笑い

お互い顔を見合わせて笑いっぱなしでした。

～農家の方から～

簡単な日本語なら大丈夫という子どもも一人いたのですが、秋田方言だと早口に感じるようでほとんど伝わりませんでした。そんなときは、もうお互い笑うしかありません。困っていることがあったとしても、今、困っているということにも気づかない状態です（笑）。

でも本当に知りたいことがあれば、日本語が少しできる子どもが「もう少しゆっくり話してくれませんか」と言ってくれました。

ポイント

- ことばで伝わらなくともイライラせず，笑い合える気持ちの余裕がある。
- 困難の存在さえ伝わらないという状況を，自分と相手の間に起こっている問題としてではなく，第三者的視点で，愉快的状況としてとらえなおしている。
- 笑い合うことで，相手にもこうした状況認識を広げている。

Solution 1-3

踊り

最後の晩，昔からの手踊りを教えて，一緒に踊りました。

～農家の方から～

うちには，日本語が理解できる子がまったくおらず，滞在の間じゅう，これで対応がよいのかと心配していました。でも最後の晩，祖母が古くから伝わる手踊りを教えて，一緒になって踊ったそうです。そうしたら別れ際には，「また会おうね」と笑顔で帰っていきました。

ポイント

- ことばで正確に情報を伝え合うことができなくても、自分が得意とする別の方法で、関係を築いている。
- 帰り際の子どもの反応から、この可能性をさらに確信している。

Solution 1-4

便利な機器

パソコンで英単語を並べて見せる，電子辞書で調べて見せたりしました。

～農家の方から～

英語で話してもイントネーションが違وراしく，なかなか伝わらないので，パソコンで単語を並べたり，電子辞書やスマートフォンを使って見せたりしました。自分はあまり得意ではないけれど，孫やお母さん（妻）はその分野得意だから。

ポイント

- 話して伝わらない場合、新しい機器を使うなどして、別の方法に果敢に挑戦。
- 自分がその方法に不得手な場合、周りの得意な人に頼って任せる。

Solution 1-5

行政サポート

情報を詳しく伝えなければいけない場合は、市が準備していた通訳に連絡しました。

～農家の方から～

この団体の受け入れは市が主催していました。そのため市は、いざというときに備えて、常時電話で連絡できる通訳を用意していました。周りの人に頼んだり、ことば以外の方法で伝えられるときも多かったのですが、込み入った話のときには通訳をお願いしました。

ポイント

- 上部組織が、ことばができないことが引き起こす問題や不自由さをあらかじめ考慮に入れている。
- 上部組織が、通訳によるバックアップ体制を整えている。

Case 2

食事に口を付けてくれない

海外（英語圏）からの高校生を受け入れたら、食事にあまり手を付けてくれませんでした。

「ごはんとパンどちらがいい？」と尋ねたら、「ごはんがいい」と答えたのですが、実際には残していました。

炒め物、サラダなど、こちらが工夫したつもりでも、ほとんど食べませんでした。

あなたならどうしますか？

Solution 2-1

残した物の観察

残した物をよく見ておいて、本当の好みを推測し、次の食事から変えるようにしました。

～農家の方から～

遠慮があるからか、「パンのほうが食べたいのでは？」と聞いても、「ご飯でいい」と答えるだけでした。でもご飯は残しており、そこでためしにトーストを出してみたらよく食べました。ほかにも、残している物を毎食見ると、何なら食べられるのかがわかるので、工夫するようにしました。

ポイント

- 高校生の言うことばを鵜呑みにせず、状況から見て、本当のことを言っていないかもしれないと判断を保留。
- ことばと実際の行動とのずれをよく観察し、後者から高校生が本当は何を望んでいるのかを推測。
- この推測に基づいて、問題を解決する。

Solution 2-2

自分で選んでもらう

スーパーマーケットに一緒に行って、食べたい物を自由に選んでもらいました。

～農家の方から～

高校生でまだ子どもだから、体にいいとか、せっかく農家に来たんだからと野菜ばかり出してみても食べないです。しかも海外出身だから、たくわんなどは食べたこともない。無理に食べさせないで、バーベキューの材料をみんなと一緒に買いに行く、好きな具の寿司を選んで買うなどしたら、喜んで選んで食べてくれました。食事の時にコーラを飲む習慣のようだったので、それも出すようにしました。

ポイント

- 収穫した農作物を食べてもらう，それが喜ばれるはずという，グリーン・ツーリズムの常識に縛られない。
- 海外出身という高校生の立場にたち，この地域独特の食べ物を嫌うことも無理はないと受けとめる。
- 年齢から，相手の好みを尊重したほうがよいと判断し，それをかなえる方法（みんなで食材を買い出し）を考え実行する。

Solution 2-3

経験者に聞く

高校生の出身地で生活したことのある親類に連絡し、食べられそうなものを聞きました。

～農家の方から～

通訳に英語で食事の好みを聞いてもらっても、遠慮からか正直に答えていないようでした。親類に、高校生たちの出身国で生活したことのある人がいたので、電話で何をよく食べるのか聞いてみました。そのアドバイスにしたがって料理を作ったら、食べてくれました。

ポイント

- 相手の様子を見て，直接は好みを言わなさそうだと判断。
- 周囲にいる，受け入れ高校生と同地域の生活を経験したことのある人に尋ねて，情報を集める。

Solution 2-4

仲間同士で情報交換

高校生が帰ったあと、農家みんなで集まり、何だったら食べたかを教え合いました。

～農家の方から～

滞在中も受け入れ農家同士で、電話連絡を取り合いました。帰ってから、みんなで集まって、何だったら食べてくれたか、答えあわせのようなことをしました。今後のことも考えて、これからまた料理など勉強しておきたいと思います。

ポイント

- 同じ活動をしている頼れる仲間がおり、お互いに情報交換をして助け合うことができる。
- 一つの受け入れが終わったら集まり、経験や問題を共有。
- 今回の受け入れ中に解決できなかったことも、反省を生かし、改善に向けて新しい取り組みを行う。

Case 3

お風呂のお湯を抜く

留学生を受け入れた時、一番風呂をわかして全員に入ってもらおうとしたのですが、最初の学生が使ったあとと見てみたら、湯船にはお湯が残っていませんでした。

時間もかかるので、そのままにしてあとの留学生にはシャワーを浴びてもらいました。

あなたならどうしますか？

Solution 3

次回の受け入れに生かす

次に海外から受け入れる際には、事前に使い方を言うておくようにします。

～農家の方から～

夕食の時にでも、いろいろな話のついでで「日本では栓抜かないんだよ」と話したりはしますが、短い期間で帰ってしまう人たちなので、頭ごなしに注意したりはしません。私たちも知らなかったことで、こういう習慣なんだなとわかったので、次からは事前に説明しようと思います。

ポイント

- 自分の常識と違っていても、相手がこの行動をとった理由を押し量り、注意しない。
- むしろ習慣の違いを予想していなかったと、こちらの知識の不足を反省し、次回の受け入れ時の注意点として記憶。

Case 4

ホームシック

海外から団体で、高校生が研修に来ました。全日程は1ヶ月でしたが、最後の1週間に受け入れ、うちには3名が来ました。

ホームシックにかかっていたようで、毎日、親に電話していました。

3名の仲間同士でもあまり話さず、緊張しているようでした。

あなたならどうしますか？

Solution 4

別のグループと行動

別の 3 人グループと一緒に、合同で書道体験をしたり、食事をしたりしました。

～農家の方から～

どんな人でも、遠くから来て、1 ヶ月もいろんな違う習慣のところをまわっていたらホームシックにかかると思います。うちに来た 3 人も、毎日親に電話していました。この 3 人はうちでの受け入れで初めて同じグループになったようで、最初はあまり話しもしていない様子でした。別のもう一つのうちに行って、合同で書道を体験したりバーベキューしたりしているうちに、だいぶ打ち解けてきました。

ポイント

- 海外出身の高校生が、1 ヶ月も他国で過ごし、かつ複数の場所を回ってきているという背景から、ホームシックにかかるのも当たり前と、状況を受けとめる。
- 他のグループと一緒に行動するという解決方法を見つけ、実行。3 人だけであれば、こちらの目も届きすぎ、緊張が解けないという判断があったと考えられる。

Case 5

仲間に入れない

子どもを受け入れたのですが、グループの中に普段、登校拒否で学校に行っていない子どもが一人いました。

農業体験旅行にだけ参加するので、グループのほかのメンバーともなじめず、一人でぼつんとしています。

あなたならどうしますか？

Solution 5

声をかけて一緒に作業

一人でいるようなら声をかけ、グループみんなで作業をするようにしました。

～農家の方から～

登校拒否の子どもがいると聞いていたり、様子を見ていて少しおかしいなと思ったら、基本的にはほかの子どもと分け隔てなく接しますが、注意して見ておくようにはします。一人でぼつんというようなら、声をかけて一緒に仕事をするように仕向けます。この体験を今日からずっと忘れられない思い出にしてほしいし、必ず思い出になって、このグループの仲間が一生の財産になるんです。

ポイント

- 分け隔てなく接し、ほかの子どもと異質な存在として見られている、捉えられているという意識を生まれさせない。
- しかし注意はしておいて、必要に応じて声をかけ、孤立しないようにする。
- 一生の思い出、グループという財産を作る機会だ、機会にするんだという熱意と決意をもって、子どもに対応する。

Case 6

まったく話さない

小学生の子どもを受け入れました。仲間はずれにされているというわけではなさそうでしたが、グループの中の一人が、うちに着いてから、一言もことばを発しませんでした。

あなたならどうしますか？

Solution 6

話しかける

特に返事はなかったのですが、話しかけるだけ話しかけました。

～農家の方から～

うちに子どもやお客さんを受け入れるという、お客さん相手の仕事をしているのですが、私もどちらかといえば人見知りなんです。だから、うちに来て黙っている子どもの気持ちもなんとなくわかります。知らない人のうちに来て、急に話なんかできないよねって。

ポイント

- 子どもが一言もことばを発しないことを、おかしいこととみなさない。
- 自分の性格や経験を重ねて、無理のないこととして受けとめている。
- しかし単にそっとしておくのではなく、返事はなくても話しかけつづけるという行動を実行。

Case 7

急に泣き出す

小学生のグループを受け入れた時、中に一人、昔いじめを受けていたという子どもがいました。

事前に先生から聞いていたのですが、いじめのことを思い出すのか、農作業の間にパニックになって、急に泣き出してしまったことがありました。

ほかの子どもたちの仲間にも入れませんでした。

あなたならどうしますか？

Solution 7

特技をほめる

その子どもが好きなこと、得意なことがわかったら、徹底的にほめました。

～農家の方から～

いじめられたときのことを思い出したら、わーっとなりますよ。大人でもいろんな事情があるし。自分も昔は勉強できなくてひがむところがありました。そのときの気持ちを思い出して接してみましたら、だんだん気持ちを許してくれるようになりました。そうして自分の趣味について話し出したので、それが特技だ、仕事にもつながると、一生懸命ほめました。あとで親から「ほめられた！」と喜んで帰ってきたと電話がきました。

ポイント

- 子どもの身になり，子どもが急に泣く気持ちを押し量る。
- 大人でも事情・経験は多様だという前提に立ち，子どもの行動を非常識とみなさない。
- 一人ひとりには必ず得意なことがあるので，それを見つけようとし，見つけたら徹底的にほめる。

Case 8

取っ組み合いのけんか

中学生を受け入れた時、農業体験の最中に取っ組み合いのけんかが始まりました。

本人たちは、あまりに感情的になっていて自分たちで止める気配はありません。

体も大きく、放っておいたらケガをすることになりそうでした。

あなたならどうしますか？

Solution 8

冗談にしてしまう

笑いながら「冗談はこれぐらい。さ次の作業お願いします」と言って止めました。

～農家の方から～

絶対にけがはさせられないし、一生の一度の体験として来るんだから、良い思い出をもって帰してやりたい。心に傷をもたせることになったらだめです。体格もいいし、こっちが本気で割って入ったら、そのけんかは本当になってしまう。だから冗談、遊びでやったような形にもっていったんです。

ポイント

- 絶対にけがはさせない、よい思い出にするという、受け入れに対する前提的な考え方がある。
- 他方で、中学生は体格も大きくブレーキが利かない状況であり、こちらが本気で臨めば、けんかが本物になることを瞬時に判断。
- 声掛け一つで、けんかを冗談の一つとして位置づけ直すことで、当事者や周りの他のメンバーにもその位置づけを納得させる。

Case 9

あまりにわがままな行動

子どもや高校生、留学生など、いろいろな人が農業体験にやってきます。その中で時々、度が過ぎるほど、自分勝手な行動をとる人もいます。

あなたならどうしますか？

Solution 9

目的を尋ねて励ます

話のついでに、秋田（日本）に来た目的を聞いて、最後は励まして終わりました。

～農家の方から～

あまりに勝手な行動をとる子どもや学生は注意しないといけないと思います。でも頭ごなしにその場で注意するのではなくて、いろんな話をする中で、「何しに秋田（日本）に来たの？」と尋ねて、答えを聞いて、最後には「じゃあ、これからも頑張っってねー」と励まして終わるんです。

ポイント

- その場で注意するのではなくて、さまざまな話をしながら、今、自分がここにいる理由、何をめざして日々頑張っているのかを尋ねる。
- 目的をもう一度思い出してもらうことで、今回の体験の意味を自分自身で考え直してもらう。
- 注意するよりむしろ、日ごろの努力を労り、励ます。

Case 10

約束の時間に遅刻

大学生の受け入れのときに、約束の時間より 1 時間遅れてきました。

途中、引率者に電話を入れてもつながりませんでした。

受け入れのためのサポーターとして、ほかの二つの農家も待機してくれていました。

あなたならどうしますか？

Solution 10

心の底から注意する

大きな雷を落としましたが、最後に、「どうでもいい人には怒らない」とも言いました。

～農家の方から～

引率の先生も含めて雷を落としました。「やがて社会にでる大学生がこんなのでいいのか」と。でも最後に「どうでもいい人だったら怒らない」と話したら、学生の顔が明るくなり、次からは遅刻もせず、雰囲気もとてもよくなりました。相手を心配して一生懸命怒ればよいと思います。

手伝いに来てくれた仲間がいなかったらこんなに怒らなかったかもしれません。こういう活動は一人では成り立たないです。

ポイント

- 怒るときは本気で、しかし相手のために怒る。そして相手のことを思っているということを、言葉に出して伝える。
- この熱意を伝えることで、確かな信頼関係を作っている。
- 受け入れは仲間がいてこそ初めて成り立つ活動だという認識に立って、仲間に影響するような問題が起これば決してごまかさず、きちんと対応する。

おわりに

調査の背景・目的・結果

本冊子は、2012年9月11日・12日に、秋田県仙北市西木町でグリーン・ツーリズムを運営する農家7軒に行ったインタビュー調査の結果をもとにしています。この7軒のみなさんは、今では自分たちで立ち上げた「グリーン・ツーリズム西木研究会」の会員ですが、1992年に政府がグリーン・ツーリズムという用語を使い始めたよりはるか以前の1981年頃から、都会の子どもなど農業体験希望者を受け入れてきました。

私自身がこの西木町の農家のみなさんに出会ったのは、留学生用の課外での教育プログラムを担当するようになったことがきっかけでした。2008年6月に秋田大学国際交流センターに着任して間もなく、当時の副センター長であった宮本律子さんから、留学生に秋田の地場産業である農業を体験させたいという話がありました。秋田に来たのは就職の面接で初めてという私にはまったく地縁もなく、その時はよいアイデアが浮かびませんでした。しばらくして、県内高等教育機関の留学生が40名ほど集まる課外活動に、引率者として参加する機会を得ました。秋田県の観光資源に恵まれたある地域を留学生が訪れ、地域住民を招いて観光などをさらに盛り上げる提言を発表し、旅館で食事をいっしょにとるという内容でした。私が着任する以前から、3年間続いて行われていた取り組みで、中島記念国際交流財団助成による地域交流事業として継続して助成を受けていたことから、街おこしの一環として意義深いプログラムだったと思います。

同時に私は、有名な観光地を回っても、地域の人々との深い交流にはつながらないのではないかという印象も持っていました。これを留学生が農業を体験する機会にしたらどうかというアイデアが浮かび、翌年度に向け私が

この事業（秋田地域留学生交流推進会議主催の地域との交流プログラム）の企画を考えることとなりました。

秋田県には、県内のグリーン・ツーリズム組織を束ねつつ、新たな参入も促す「秋田花まるっ グリーン・ツーリズム推進協議会」という団体があり（1999年に任意団体として設立、2012年に特定非営利活動法人化）、そこに連絡をとって西木町が候補地となるまでに時間はかかりませんでした。しかし思わぬところから、農業体験プログラムとすることへの異議の声があがりました。1年目のプログラム報告書にも書いたことですが（秋田地域留学生交流推進会議 2009：1）、プログラムの事務局を担当する秋田大学国際交流センター事務（当時）の齋藤裕幸さんから、有名な場所を見て旅館に行き、ゆっくり温泉にもつかれる例年のやり方のほうがいいのではという意見が出てきたのです。よくよく聞いてみると、齋藤さんには、農作業に楽しいというイメージはまったくなく、大変で強制的に手伝わされるものという印象が強いのだと気づきました。留学生にとっては、というより県外出身の私にとっては、農業を本業とするお宅に実際に泊まり、そこで取れたものを食べ、作業を手伝うというプロセスがすべて魅力的に思っていたのとは、対照的でした。

留学生にとっては忘れられない経験になるはずだと説得し、齋藤さんにグリーン・ツーリズム西木研究会の当時の会長、藤井けい子さんに連絡を取ってもらいました。藤井さんと相談しながらだいたいの計画を立てた後、2009年4月には申請していた、中島記念国際交流財団助成・地域交流事業に採択されたとの連絡が入り、実施の見通しが立ちました。

その後、7月ごろに詳しい予定を決めるため、藤井さんのご自宅を訪ねました。藤井さんに私たちのだいたいの希望を伝えたところ、外国人を団体で受け入れたことはないけど、なんとでもなるしできるだろうということで、西木町にお願いすることで決定しました。自宅外の東屋で太陽と風を感じなが

らの打ち合わせでしたが、やり取りを続けるうちに、藤井さんのおおらかさと同時に仕事への厳しさが感じられ、ここに留学生と一緒に来ようという思いを強めました。

しかし、一泊二日の農家泊体験と、日帰りの収穫感謝祭とを組み合わせた本プログラムの実施にあたっては、西木町のみなさんにとって、数十人の外国人を迎えるのは初めてということもあり、少し心配もしていました。このプログラムでは、秋田県内の4～5の高等教育機関から留学生、日本人学生、引率の教職員が集まるため、初めて顔を合わせる者同士もまじっての宿泊体験となります。グループには必ず通訳の役割が果たせる人を入れるなど、工夫はしているものの、日本語を学び始めて1ヶ月という留学生もおり、ことばの壁は当然予想されました。さらに来日間もなく、農家はおろか寮以外で一夜も過ごしたことがないという留学生もおり、初めての農家での宿泊や農作業で問題は起きないかということも心配しました。

しかし2011年度まで3年間の実施を通し、留学生や引率者からの反応（特に、開始から続けて引率を担当してくださっている秋田県立大学総合科学教育研究センター准教授のテリー・リー・ナガハシさん）、実施後のアンケートの結果（秋田地域留学生交流推進会議主催2009, 2010, 2011）、私自身の経験、それらすべてからこのプログラムが、参加した人たちにとって、忘れられないそして非常に心地のよい経験になりえていると確信するようになりました。温泉旅館がいいと農業体験に反対していた齋藤さんが、1年目の引率を終えて残した「農家もいいもんですな」ということばも、この確信を支える一助です。

外国人団体を受け入れたことのなかった西木町の農家の方々が、なぜこれほどまでに、参加者に満足感をもたらすことができるのか。宿泊先となる農家は毎年7～8軒で、うちによっても方針や対応に違いもあるはずです。にもかかわらず、プログラムの後に参加者からクレームが聞かれたということ

はほぼ皆無でした。一体なぜなのか。

ちょうどこのことをはっきりと自覚し始めた頃、私は自分の専門である日本語教育学の戦後を、ナショナリズムとの関係という観点から単行本にまとめようとしていました（牲川 2012）。1970年頃の日本語教育は、日本人と同じように考え行動しながら日本語が使えて初めて、日本語能力が身に付いたと言えるといった同化的な主張をしていました。また最近では、それぞれの文化を尊重させるとしながら、国籍や民族による文化の異なりを強調し、結果としてその間に強固な壁を築いてしまうような教育を、よいものとして分析する研究も行われています。そのことを考えた時、農家のみなさんよりむしろ、日常的に外国人に関わっている日本語教育者の方が、個々の人々を国籍や民族という枠の中に閉じ込め、ことばやそれ以外の方法で気持ちや考えを交換することを妨げてきたのではないかと思い始めました。

また近年の言語教育の分野では、一人の人間が複数の言語や文化を用いることができるという複言語・複文化主義の考え方が広がっています（細川・西山 2010）。しかし、この考え方が論じられるとき、他者とコミュニケーションする能力の高い者として想定されているのは、いろいろな国や地域の言語が使える人、それらの文化を経験したことのある人です（牲川 2013）。西木町の農家のみなさんは、決してこの条件にあてはまるわけではないですが、30年にもわたり、外国人以外にもさまざまな家族以外の人を自宅に受け入れ、一緒に寝泊まりし作業することを繰り返してきました。私の企画プログラムも含めリピーターは後を絶ちません。

他者とコミュニケーションする力は、特別な異文化とのつながりがないと得られないものなのか。そうではないという仮説から、私は西木町のグリーン・ツーリズム運営農家のみなさんのもつ能力を探りたいと思い、2012年から調査を始めました。本小冊子はその成果の一部です。

小冊子を利用されると、留学生担当教職員にとっては自分も日々やっつい

と思われる対応がある一方、予想外であったり、すごいと思わせる解決方法もあったかと思います。

私も、絵やボディーランゲージで表現するなどは、日常茶飯事です。けれども、その背後にある農家の方々の熱意に驚かされました。知り合いで通訳ができる人もいるけれど、その人に頼んだらなんだか自分が仲間に入れないようで悔しい、だから頼まないで、一生懸命目を見て身振り手振りで伝えるという答え。正確な情報が伝わらなくてもいいから、留学生などの輪に自分も入りどうしても直接気持ちのやり取りをしたいという熱意と、ことばで出せなくてもそれができるのだという信念とが伝わってきました。

私が一番驚かされたのは、取っ組み合いのけんかのとき「冗談はこれで終わり」と言って止めたという農家の方の話でした。その方は男性でしたので、本気のけんかを見れば、こちらも体で割って入る、ほかの人を連れてきて何とか止める、水をかけるなど、もっと手荒な方法を想像しました。けんかも昔あったという話をされたとき、どう対応したかなかなか話してくださらず、単に「おじさんの技」と流されそうになりました。たいしたことはない、あるいは秘訣と思われたのかもしれませんが。さらに食い下がって尋ねると、向こうは体格もいいし、自分自身でストップが効く状態でもなかった、こっちが本気で止めれば、けんかも本物になってしまう、だから冗談か遊びだったかのようにして「冗談はこれで終わり」と言って、「次の作業お願いしまーす」とずらすんだ、と答えてくださいました。そして「けがは絶対にさせられない。必ず一生の思い出になるようにしたい」とのことばも。

子どもたちの受け入れにあたって、一生の思い出にするという考えがあり、だからこそ、けんかを止める必要がある、そのために、子どもの体格や様子から瞬時に判断し、本気のけんかを冗談へとずらすという解決が図られています。グリーン・ツーリズムに対する基本的で守るべき理念があり、それを実現するために、観察に基づいて瞬時に判断し、適切な解決方法をとって

たことがわかります。

そのほかの事例についても、一つひとつの解決方法の背後には、農業体験への受け入れ、ことばや人間というものに対する固有の理念があります。この小冊子は、研修での利用をめざしているため、説明を簡略化し、理念についても「ポイント」としてごく簡単にまとめるにとどめました。利用者の方にはぜひ、一つひとつの解決方法を支える理念とは何かをじっくりと考えてみていただければと思います。留学生の問題を考えると、あまりに自分の身近すぎて生々しく、ほかの担当者の方を知っても率直に受け入れることは難しいかもしれません。現場の状況は場所により時により異なっているのでなおさらです。けれどもそうした個々の状況に関わらず、根本的な理念があればそれが状況への対応を支えてくれます。農家の方々の問題解決の方法とそれを支える理念を、一体それは何なのかと考えてみることは、留学生受入業務とは何か、なぜ自分はそれを仕事とし何をめざして動いているのかという、自分自身の毎日を振り返るきっかけにもなります。気軽にそして真剣に本冊子をご利用いただければ幸いです。

なお、本冊子中の「Case」「Solution」「農家の方から」は、基本的にはインタビュー調査結果に基づいていますが、発言者が特定できないよう、複数の農家の発言を一つとする、一部を書き換えるなど、改変を加えた点があることをお断りします。

また、グリーン・ツーリズムに関する先行研究の収集については、高村竜平さん（秋田大学教育文化学部准教授）に、秋田大学国際交流センターによる調査協力に関しては宮本律子さん（元国際交流センター副センター長、秋田大学教育文化学部教授）の協力を得ました。

*

最後に、今回の調査にあたり、「グリーン・ツーリズム西木研究会」のメンバーのみなさんには大変お世話になりました。ここで農業体験をしていただ

くことが、本小冊子の主張を理解してもらうための最も適した方法だと思えます。各農家の詳細については以下をご参照ください。

美の国秋田・桃源郷に行く——田舎に泊まろう

<http://www.akita-gt.org/stay/>

* ウェブページ下部の仙北市の農家のうち、住所が西木町のものがグリーン・ツーリズム西木研究会の農家のみなさんです。

* 団体での宿泊希望については、グリーン・ツーリズム西木研究会会長の門脇富士見さん（星雪館）まで

関連文献

秋田地域留学生等交流推進会議（編），2009，『秋田の農家民泊 in 西木町——体験から持続的交流へ 実施報告書』秋田地域留学生等交流推進会議。

秋田地域留学生等交流推進会議（編），2010，『秋田の農家民泊——持続的交流の展開 実施報告書』秋田地域留学生等交流推進会議。

秋田地域留学生等交流推進会議（編），2011，『する・聞く・語る秋田の農業 in 西木町 実施報告書』秋田地域留学生等交流推進会議。

秋田地域留学生等交流推進会議（編），2012，『第三の故郷を見つける農家民泊 実施報告書』秋田地域留学生等交流推進会議。

牲川波都季，2012，『戦後日本語教育学とナショナリズム——「思考様式言説」に見る包摂と差異化の論理』くろしお出版。

牲川波都季，2013，誰が複言語・複文化能力をもつのか，『言語文化教育研究』11，134-149。

細川英雄・西山教行（編），2010，『複言語・複文化主義とは何か——ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ』くろしお出版。

* 本小冊子は、公益財団法人日本科学協会笹川科学研究助成 24-823, JSPS 科研費 24652098 および JSPS 科研費 26870061 による研究成果の一部です。

農家に学ぶ留学生受入の思想と方法

秋田県仙北市西木町のグリーン・ツーリズム事例集

発行日：2013年2月5日初版発行，2013年4月30日第2版発行，
2016年2月10日第3版発行

編著者：牲川 波都季

発行者：牲川 波都季

発行所：関西学院大学総合政策学部 牲川研究室

〒669-1337 兵庫県三田市学園 2-1

連絡先：segawa@kwansei.ac.jp
